

「Walker の音韻論」研究

—後期近代英語音韻体系の樹立—

小林智賀平

日本音声学会の副会長として功勞のあつた、岡倉由三郎教授手摺本の John Walker の英語発音辞典(1840年版の A Critical Pronouncing Dictionary)によつて、Walker の音韻論を英語音韻發達史と關聯させて考えることにしよう。

I. Walker の Life と著作

Walker は 1732 年 3 月 18 日に英国 Middlesex の Colney Hatch で生れた。父は John の幼少の折死んだが、詳しいことは何も知られていない。母は Nottingham 州の生れで、當時有名な非国教会牧師 James Morley の妹であつた。幼少にしてウォーカーは學校をさがり、商売の見習ひにやられたが、母の死後若くして俳優となり、當時千両役者として知られた David Garrick が座元となつていたロンドンの Drury Lane 座にも出たり、また Garrick と共演したりした。この時は悲劇の方に多く出て、喜劇の場合は淡い役柄の方にまわつた。それから 1758 年 27 歳の時、當時有名な喜劇役者の Myners と結婚した。その年から 1762 年までダブリンの Crow Street Theater に出て、ついに名題役者となつた。彼の勤める Cato や Brutus の好演技は大評判となつた。その後ロンドンにもどつては、夫婦して、1762 年から 67 年にわたつて Covent Garden に出たこともある。1768 年の夏 37 歳の Walker は Bristol の芝居を最後として舞台を退き、James Usher と協力して Kensington で學校を開き、1769 年から 71 年まで二年間發声法 (Elocution) を教えたこともある。またロンドンだけでなく、スコットランド、アイルランドなど地方を巡回して、發声法の講演をしたこともあつた。また Oxford 大学では、ある学寮長から依頼をうけて大学での講義をやつたこともある。それから Dr.

Johnson 始め当代一流の名士たちの知遇をうけたり、^{註1} またカトリック教会に入りそれが縁となつて、Castabala 司教 John Milner と親交を結ぶようになった。そしてウォーカーは言語学、発音学の知識と談話の妙によつて、人々から重んぜられていた。もつとも Madame d'Arblay という人の日記 (Diary ii. 237) によると、'though modest in science, he was vulgar in conversation' とあるが、彼の風采の一端を伝えるものである。そして発音の説明には後で説くような数字の使用によつて、一般の人々にもわかり易いようにいろいろ工夫したので、彼の説は広く行われ、講演やパンフレットで一身代できたらしい。

ウォーカーは早くも 1774 年に発音辞典の案を練り、十数年かかった 1791 年に *A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language* となつて世に出たのである。このほか *A General Idea of a Pronouncing Dictionary of the English Language on a Plan entirely New. With Observations on Several Words, That are Variously Pronounced as a Specimen of the Work* (London, 1774) とか、また有名な脚韻辞典 *A Dictionary of the English Language, Answering at once the Purposes of Rhyming, Spelling, and Pronouncing, on a Plan not hitherto Attempted* (London, 1775) を出した。この脚韻辞典の方は三版 (1819 年) からは、今日の *A Rhyming Dictionary of the English Language* という名前で出ている。これは今日でも版を重ねて丸善辺りにきているが、なお十九世紀のスコットランド生れの哲学者として有名な Alexander C. Fraser (1819—1914) 手書きの写本が大英博物館にある。また *Exercises for Improvement in Elocution ; being select Extracts from the best Authors for the use of those who Study the Art of Reading and Speaking in Public* (London, 1777), *Elements of Elocution : being the Substance of a Course of Lectures on the Art of Reading, delivered at Several Colleges……in Oxford, (London 1787, 2 Vols.) ; 2nd edition; with*

Alterations and Additions (London, 1799) ; reprinted (London, 1802) ; Boston, 1810) ; 4th edition (London, 1810) ; 6th edition (London, 1820) ; other edition 1824 & 1838 のほか、Hints for Improvement in the Art of Reading (London, 1783), さらに A Rhetorical Grammar, or Course of Lessons in Elocution dedicated to Dr. Johnson (London, 1785, 71823) のような修辞文典を出してジョンソン博士に献呈している。また The Melody of Speaking delineated ; or Elocution taught like Music, by Visible Signs, adapted to the Tones, Inflexions, and Variation of the Voice in Reading and Speaking (London, 1789) や A Key to the Classical Pronunciation of Greek and Latin Proper Names…… To Which is added a Complete Vocabulary of Scripture Proper Names (London, 1798 ; 71822 ; another edition, prepared by William Trollope, 1833. Prefixed to the original edition is a fine portrait of Walker), さらに The Academic Speaker, or a Selection of Parliamentary Debates, Oration, Odes, Scenes, and Speeches……to which is prefixed Elements of Gesture (4th edition, London 1801 ; 61806) やまた、The Teacher's Assistant in English Composition, or Easy Rules for Writing Themes and Composing Exercises (London 1801, 1802 ; reprinted under the title of English Themes and Essays (91842, 111853) のほか、Outlines of English Grammar (London, 1805, reprinted 1810) も出している。このうち一番よく出たのは Rhyming Dictionary と Pronouncing Dictionary である。ことに発音辞典の方は 19 世紀後半までこの方面の権威とされており、31802, 41806, 51810, 261826 等々と版を重ねてゆき、およそ 40 版に達している。このように売れるといろいろ改訂本が出たが、特に有名なのは A Pronouncing Dictionary critically revised, enlarged and amended, by P. A. Nuttal (London 1855) である。なおこの時代は英文学史上いわゆる Dr. Johnson 時代であつて、名士文人が輩出したが、Walker は前に述べたよう

に名優 David Garrick だけでなく、文壇の大御所 Dr. Johnson や、歴史家として知られた名士 Edmund Burke などとも交わり (参照 J. Boswell, *Life of Johnson*, ed. by Hill, iv. pp. 206, 421), 俳優, 発音学者として知られただけでなく、教養人としての名声もあがり、著書もよく売れて産をなし、1802年妻に先立たれたが、66歳にして幸福のうちに1807年8月1日ロンドンで一生を終つた。

II. 英国音韻学派における Wakler の位置

英国において音声研究が学術的に行われるようになったのは、19世紀後半になつてからであるが、発音を表示する試みは18世紀前半から行われ、さらに17世紀に溯れば文法家や正韻論者なども、多少発音、アクセントに触れているが、これらはいわば音声学以前の研究にすぎないから、ここでは一々について詳しく述べることをやめ、ただ注意すべき書物の題を掲げておく。

A. Gill, *Logonomia Anglica*. 1621.

C. Buttler, *The English Grammar*. 1634.

J. Wallis, *Grammatica Linguae Anglicanae*. 1653.

C. Cooper, *Grammatica Linguae Anglicanae*. 1685.

J. Jones, *Practical Phonography*. 1701.

このうち Cooper のは英語史関係の書物によく引合に出る注意すべきものである。さらに18世紀に入つて現われたものにつぎのものがある。

N. Baily, *An Universal Etymological Dictionary*. 1721, 1731.

J. Elphinston, *The Principles of the English Language or English Grammar*. 1765.

W. Johnston, *A Pronouncing and Spelling Dictionary*. 1771.

W. Kenrick, *A New Dictionary of the English Language*. 1773.

S. Johnson, *A Dictionary of the English Language*, 2 Vols. 1755.

T. Sheridan, *A General Dictionary of the English Language*. 1780.

W. Perry, A Royal Standard English Dictionary. 1788.

J. Walker, A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language. 1791.

S. Jones, A General Pronouncing Dictionary of the English Language. 1798.

このうち Baily の辞書 (1731 年の 5 版) は 18 世紀にあつて早くもアクセント符号をつけ、また分綴法を示したものとして注意を要する。このほか Baily には Dictionarium Britannia (1730, 二折版 pp. 900) もあり、Dr. Johnson の辞典はこれを基として編纂したといわれる。また Walker よりおよそ 20 年前に出た Kenrick の辞書は綴字の字母に数字を使つて発音表記を記し、ウォーカー発音辞典の表記法に範をたれたものとして注意すべきである。また Johnson の辞書にもアクセントづけがあること、Baily の辞書と同じである、なお Sheridan の辞書も語音表記を試みているが、元来彼の狙いは正韻論者として、正しい綴字を確立することであつた。ウォーカーもまた正韻論者の立場になつて語音表記をしているわけで、解説の箇所ではそのころまでに出版各種辞典 (Sheridan, Scott, Buchanan, Johnston, Kenrick 等々) を十冊余りも引合ひに出していろいろと論じているから、当時の発音研究の重要な資料を網羅的に提供した、ほとんど唯一の資料として価値が高いものである。この点から考えてもこの発音辞典はアカデミックな力作として英語史研究上、一つの landmark になるわけである。

19 世紀半ばをすぎると、Bell, Sweet, Ellis などが輩出してここに英国音声学は確立するのであるが、それまで半世紀以上にわたつてウォーカーの発音辞典は斯界の権威として長い生命力をもち、その頃すでに 40 版以上にも達した。ウォーカーの後に現われたのはスコットランド人 A. M. Bell (1815—1905) である。ベルの Visible Speech (London & N. Y, 1867) は独特の一音一符号的な記号でくわしく母音を観察して母音表四図にまとめて記述し、各音と記号との有機的關係を明らかにしたが、これは音声の精密分析には有用であつ

ても、それがすぐそのまま実用にはならない。なおこれはかつて伊沢修二氏が「視話法」と訳して紹介し、日本音声学会の文献にも出ている。ベルの後継者 Henry Sweet は *Primer of Phonetics* (1890, 1902²) でこの 'Visible Speech' を改良して、いわゆる Romic Notation をつくり、母音表も 8 表に増して説明した。またその著 *Handbook of Phonetics* (1877) ではベルの音声学を補正して、いわゆる Bell-Sweet の母音分類をつくり、ここにイギリス派音声学は確立したわけである。なおスウィートは後に *Sounds of English* (1908) のごとき好著も出している。また一方 A. J. Ellis は *A Plea for Phonetic Spelling* (1848), *Essentials of Phonetics* (1849), *Phonetics: A Familiar System of the Principles of that Science* (1844) などにより、表音的正字法を説いた。以上のような音声学の歴史的展開によつて、Sweet による英国音声学の樹立以前に、ウォーカーの辞典がいかに大きな指導的役割を演じてきたかが、明らかになった。そこでウォーカーの音声理論について述べることにしよう。

III. Walker 音声理論の輪廓

ウォーカーの「発音辞典」「脚韻辞典」など調べてみたが、彼の音声理論の大要を知るには「発音辞典」の前部につけた解説 (pp. 15—71) を読めばよい。もちろん細かい点になると、一語一語について本文の表記を丹念に調べ、またウォーカーの註記を読まないで断定をくだしにくいこともあるから注意を要する。まず彼の学説の輪廓を示すため理論体系を表示するとつぎのようになる。

- A. 母音子音の分類 1) 母音, 子音の定義 2) 母音表 附, 二重母音, 三重母音 3) 子音分類と子音表
- B. 母音の量と質 附, アクセントが発音に与える影響
- C. 母音詳論 1) A, E, I, O, U の各種音 2) 半子音 (Y, W) と二重母音 (AE, AI, AO etc.)
- D. 子音詳論

E. アクセント論

F. 音量論

G. 綴字法

H. 総括 附, 母音表

以上の全般について詳論することは紙数が許さないのので、今はウォーカーの音声理論の中核をなす母音各論に重点をおいて研究し、その結果を母音図にまとめあげれば、音声学的にも英語史的にも重要な資料を提供するわけであろう。しかしそこまでにいたる基礎的な問題を、いくつか説明しておく。まず母音については、

A vowel is a simple sound formed by a continued effusion of the breath, and a certain conformation of the mouth, without any alteration in the position, or any motion of the organs of speech, from the moment the vowel sound commences till it ends.

と定義しているのでもわかるように、調音的に見て「狭まり障害がない」という今日の定義とほぼ同じである。また子音は、

A consonant may be defined to be an interruption of the effusion of voiced sound, arising from the application of the organs of speech to each other.

と定義しているから、今日の「障害説」と同じ調音的立場であるが、「狭まり」をあげていないのが注意される。

それから母音は simple と compound に二分するが、simple vowel とは a, e, o の三つであり、発音器官をただ一回適合 (conformation つまり調音) させて出すのに対して、compound の方は i, u であるが、これはその母音をいいおわるのに発音器官の位置が動くものである。したがってこの考え方は今日の 'kinetic vowel' の見方とよく似ているが、今日いう重母音は後で diphthong として出てくる。また y, w は語頭では子音、語尾では母音となる。ただし woo, coo の -oo- は pure vowel, food, mood, too の oo は、

口をつぼめて両唇がつきそうになつて発音されるから、'squeezed' と形容される。そしてこの oo は i, u と同様重母音というよりむしろ母音と子音の中間であるとしている。

つぎに母音の分類に入るが、ここでは表を掲げることども、説明は省略する。

a	paper	}	simple or pure vowels	i	title	}	compound or impure vowels
a	father			y	cyder		
a	water			u	lucid		
e	metre			w	power		
e	noble						
ou	coo						

つぎに二母音で一シラブルをつくるのを diphthong と呼び、例をあげているが、これは多くの説明を要しない。

ae	Caesar	ei	ceiling	ea	coat	ui	languid
ai	aim	eo	people	oe	oeconomy	uy	buy
ao	gaol	eu	feud	oi	voice	aye	(for ever)
au	taugh	ew	jewel	oo	moon	eau	beauty
aw	law	ey	they	ou	found	eou	plenteous
ay	say	ia	poniard	ow	now	ieu	adieu
ea	clean	ie	fiend	oy	boy	oeu	manoeuvre
ee	reed	io	passion	ue	mansuetude		

つぎに子音は調音位置と方法とから分類されているが、くわしい説明は省略して表示すると、つぎのようになる。

Analogical Table of the Consonants

Mute labials	{	Sharp, <i>p, pom</i>	}	labionasal
		Flat, <i>b, bomb</i>		
Hissing labials	{	Sharp, <i>f, if</i>	}	liquid <i>m.</i>
		Flat, <i>v, of</i>		

Mute dentals	{ Sharp, <i>t</i> } <i>tat</i> { Flat, <i>d</i> } <i>dad</i>	Aspirated	{ <i>etch</i> <i>edge</i> or <i>j</i>	} dentonasal liquid <i>n</i> .
Hissing dentals	{ Sharp, <i>s</i> } <i>say</i> { Flat, <i>z</i> } <i>as</i>	Aspir	{ <i>esh</i> , <i>passion</i> <i>ezhe</i> , <i>vision</i>	
Lisping dentals	{ Sharp, <i>eth</i> , <i>death</i> Flat, <i>the</i> , <i>seythe</i>			
Gutturals	{ Sharp, <i>k</i> , <i>kick</i> Flat, <i>g</i> hard <i>gag</i> Dento-guttural or nasal <i>ng</i> , <i>hang</i>			} guttural liquid <i>r</i>

なお今日あまり使わない術語について簡単に説明しておく、mute は「閉鎖音」で plosive と同じであり、hissing (スー音) は 'hushing' と一緒になつて「歯擦音」となる。Lisping は「舌縫れ音」というが、'th' の表わす [θ, ð] をさす。また sharp は「無聲音」、flat は「有聲音」に当る。なお子音組織について述べることは、ここでは省略し後で図示する。

IV. 母音各論

ウォーカーの母音四辺図を再構成するためには各母音の記述を検討して、現在の音との関係を英語史的に考えることが必要である。それでまとめるためにはまず原書71頁にある 'Table of the Simple and Diphthongal Vowels referred to by the Figures over the Letters in the Dictionary' を一々参照しながら母音各論を説明するのが便利だから、ここに予じめ表示しておく。

母音一覽表

(TABLE of the SIMPLE and DIPHTHONGAL VOWELS)

English Sounds	French Sounds
1. ¹ a The long slender English <i>a</i> , as in ¹ fate, ¹ paper, &c. (73).	<i>é</i> in <i>fée</i> , <i>épée</i> .
2. ² a The long Italian <i>a</i> , as in ² far,	

- fa²-ther, pa²-pa, mam²-ma² (77). a in fable, râble.
3. a³ The broad German a, as in fall, a in âge, Châione.
wall, wa³-ter (83).
4. a⁴ The short sound of the Italian a, a in fat, matin.
as in fat⁴, mat⁴, mar⁴-ry.
5. e¹ The long e, as in me¹, here¹, me¹-tre, ê in mitre, epitre.
me¹-dium (93).
6. e² The short e, as in met², let², get² (95). e in mette, nette.
7. i¹ The long diphthongal i, as in pine¹, ti¹-tle (105). ai in laïque, naïf.
8. i² The short simple i, as in pin², tit²-tle (107). i in inne, tittre.
9. o¹ The long open o, as in no¹, note¹, no¹-tice (162). o in globe, lobe.
10. o² The long close o, as in move², ou in mouvoir,
prove² (164). pouvoir.
11. o³ The long broad o, as in nor³, for³, o in or, for,
or; like the broad a³ (167). encor.
12. o⁴ The short broad o, as in not⁴, hot⁴, got⁴ (163). o in hotte, cotte.
13. u¹ The long diphthongal u, as in iou in Cioutat,
tube¹, cube¹, cu¹-pid (171). chiourme.
14. u² The short simple u, as in tub², cup² sup² (172). eu in neuf, veuf.
15. u³ The middle or obtuse u, as in ou in boule, foule.
bull³, full³, pull³ (173).
16. oi³² The long broad o³, and the short i², (299). oi in cycloïde,
as in oil heroïque.
17. ou³³ The long broad o³, and the middle aou in Aoute.
obtuse u³³, as in thou³³, pound³³ (313).

この母音表を参照しながら母音各論についてのウォーカーの説を検討してみよう。まず注意すべきことは、彼の表記法はいわゆる今日の発音符号のよう

に、厳密の意味では一音一符号で統一されていないことである。ただ大体綴字の発音を示すために母音字の上に数字を使つて表わした、ということになり、その限りでは一つの立派な体系をなしている。つまり文字 a なら a を基として、それで綴られている各種の単語の中で、この文字の表わす音を一々調べてこれを数字で示すわけである。このように文字を基として発音の研究をしたのは、近代的音声学確立以前の当時にあつては、極く普通のことである。一般には文字は即発音と考えられていたためであろう。したがつてこの方法では、発音を基としてその一つ一つの音はいかなる文字によつて表わされているか、という点がほとんど顧みられていなかつたわけである。それからまた17世紀初頭以来の綴字改良という狙いもあつたかと思われるが、この点はウォーカーにおいてはあまり重要ではない。以上の前置をして以下母音各論に入らう。

(1) ¹a 図表の(1)に 'The long slender English a' と説明して、fate, paper の a を例として掲げている。そしてフランス語の fée, épée の é に対応すると説いているから、恐らくいまの [e:] であつたと考えられる。それを裏づける証拠としては§73の所で lade, spade, trade のように 'a+子音+e' という音構造の実例が出ている点、また pain, gain, stain のような ai の音も、この ¹a と同じだとしている点を取りたてることができよう。またフランス語を持ち出して、accent circonflex のついた e も同じだとしているか、この点も証拠として取りあげることができよう。なおこの ¹a は [e:] でなく、重母音性の [ei] でなかつたか、という問題が出てくる。これについて Jespersen は [e:>ei] の変化は18世紀中頃だという説を支持するが、ウォーカー理論の関する限り [e:] と断定して差支えなからう。したがつてこの点は、[e:>ei] という音変化は19世紀に起つたという学説を裏づけることになるわけであり、17.8世紀に起つたとする通説に反対の一資料として注意すべきである。(Jespersen, MEG. I. pp. 325ff. 参照) ただ問題となる点は bear, swear, pear の ea もこれと同じ音であり、また where, there の ere も同じだとしていることである。これはいずれも今日 [eə] と二重母音に発音するわけであるが、

この副母音 [ə] は独立的母音の性格をもつたものとしてよりもむしろ本来語尾の r 音を発音する時、その調音の始めの予備的段階に当る音であつたものが、その後 r 音プロパーの脱落により、この予備的段階の部分が確然たる音形態をとつてきた。そして音構造からみても、be-ar, pe-ar というように二音節的の性格をもつから、強勢のある be-, pe- の e はやや長めに発音されて、例えば [be'ə(r)] といったように発音されていつたらしい。したがつてこの ea で示したのは半長母音 [e:] であるから、これは paper, gain の [e:] と同様に扱うのはよろしいわけであろう。なおウォーカーは (母音+子音+e) という音構造では、“e のために子音が前の母音を短くしない” という程度の規則をあげて、rag : rage という実例をあげている。もちろん例外はあり、have [hav], are [ar], bade [bad] では ‘long, open, slender’ (つまり [e:]) にはならない。いまあげたようにここだけ ‘open’ と説明してあるが、この open は現在の音声学でいう大開き乃至半開き音の ‘open’ とは違つて、むしろ今なら half-close ぐらいの程度である。それは、O 音についても ¹o を ‘long open O’ としてあげ、他と区別しており、その音価は [o:] であるから、調音位置の開きという点では、¹a を open と評したのとほぼ同じ程度である。なお ¹a [e:] の短母音 (つまり [e]) は a という文字で現わすことを普通しないで、e で現われる (例、mate の a は [e:] であるが、met の e は [e])、という具合にウォーカーは説明している。この説き方からわかることは、ウォーカーは一応文字を基として音組織をたてたが、やはり発音そのものからも体系を見直して検討しているわけであつて、これは注意してよいと思われる。

(2) ²a 母音表の説明では ‘long Italian a’ として、²far, ²fa-ther, pa-pa², mam-ma² の ²a であり (註一紙面の都合上発音表記が数字だけですむ場合は、符号文字を使つて一々書き換えることをしないで、far [far] をただ ²far として表記する)、またフランス語の fable, râble (腰) の a であるとしているが、§77 では father の -a- に現われる ‘open sound’ と呼ぶものだとしている。ただし ‘open’ といつても、all, ball の ‘a’ とは違う。これは ³a と表

記され、もつと開きが大きいと説明している。つまりウォーカーは $\overset{2}{a}$ を 'long Italian or middle' と説明し、 $\overset{3}{a}$ を 'broad German a' と説明しているの
 で、開きの度合は、すくなくとも聴覚的印象と発音器官の運動感覚としては、
 大体 $\overset{3}{a} > \overset{2}{a}$ ということになる。つまり耳に聞こえた感じでは $\overset{2}{a}$ は、pale の $\overset{1}{a}$
 と wall の $\overset{3}{a}$ との中間音ということになる、この $\overset{3}{a}$ はいまの [ɔ:] であるから、
 $\overset{1}{a}$ は前母音であり、 $\overset{3}{a}$ は奥母音であるが、聴覚的印象としては、 $\overset{1}{a}-\overset{2}{a}-\overset{3}{a}$ が大
 体一直線になるから、 $\overset{2}{a}$ は $\overset{1}{a}$ と $\overset{3}{a}$ の中間音となるわけである。これだけの
 但書きをしておけば、'middle' とはなつているが、 $\overset{2}{a}$ はいまの「開き母音」
 であるとしてよいわけであろう。もつとも中間音といつても厳密な意味で $\overset{1}{a}$ と
 $\overset{3}{a}$ の丁度真中に $\overset{2}{a}$ がくる、というわけではない。ただ $\overset{3}{a}$ の方は咽喉の方まで大
 きく開けるので、 $\overset{2}{a}$ よりも開き度大きい、という印象が発音器官の運動から
 得られるわけである。なおウォーカーは §77. 以下の所でこの $\overset{2}{a}$ が、Toscana,
 Romana のイタリア語の a と同じだと説いている。また本来語化したギリシ
 ャ語の papa, mamma の語尾の a にも似ている、とした。なお面白いこと
 は、この $\overset{2}{a}$ がほとんどあらゆる国で羊の鳴声を表わすのに使われていると説
 いていることである。さてこの $\overset{2}{a}$ という長母音は、前にあげた father のご
 き例以外は、-ar で終る単綴語だけにほとんど限られている。なお外来語（例
 lumbago, bravado, tornado, camisado）にもこの $\overset{2}{a}$ がよく聞かれるが、
 舞台上で聞かれる bravo 以外はすべて英語 $\overset{1}{a}$ を使う方がよいとしている。この
 「中開き」のイタリア語的な $\overset{2}{a}$ 音は、(1) 単綴語の r の前（例, car, far,
 mar), (2) 流動音 lm の前（例, psalm, psalmist), (3) 時に -lve, -lf の
 前（例, calf, half, calve), (4) th の前（bath, path, lath, father), (5)
 n の前で殊に c, t, d に続く時（例, dance, glance, lance, France, chance,
 grant, plant, slander), (6) -ass-, -as-, -ast- の時（例, glass, grass,
 lass, last, fast, vast）のような場合である。そしてこの $\overset{2}{a}$ は近年短音化の
 傾向がある（例, hand, land; なおこの $\overset{4}{a}$ は今日の a, æ 音族である。grand）
 という注意を与えている。これからはつきりわかることは、この頃 hand, land

などが [ɑ:] とも発音されていたらしいことであり、その証拠としては grand を ²á としていることを考えたらよい。なお after [af'tur], answer [an'sur] basket [bas'kit], plant, mast の a (即ち ⁴á [=a, æ]) を half [hat], calf [kaf] の a (即ち ²á [=ɑ:], ³á [=ɔ:] でいずれも長音) の長さで発音するのは、'vulgarity' に近いと断じている。なお単綴語で n の前の a, また語尾の a は昔は au と綴つて、³á のように broad に発音した (つまり au は [ɔ:] に当るわけである)。その傍証として Dr. Johnson は 'broad a' で発音するものは昔は -au- と綴つた (例, fault, mault) とし、おそらくこれは Saxon 系の音であろう説いた (それでこの -au- 音はいまでも北部諸方言に聞かれるわけである。例えば田舎訛で man を maun, hand を haund と発音するときである。) そしてこの古くからの -au- も -u- を省くようになると、前より「ほせい短かい」音となる。(例, ⁴mán, ⁴hánd のごとく) ただし昔 -au- と書いたものは commaund, demaund のように、いまでも長く発音している。また calm, psalm, calf, half の黙字 'l' は、l の前の a を長くしたわけだが、アポストロフィを使つて文字を略した場合もやはり同様である。例えば cannot から -no- を取ると、can't の a は ²á (つまり 'Italian or middle a' [=ɑ:]) となる。

(3) ⁴á (§81) ここで注意すると、'middle or Italian ²á' [=ɑ:] の短母音は、man, pan, tan, hat などに現われるが、これはウォーカーは ⁴á と説明している。そしてこれはよく 'slender の a' (すなわち a [=e:]) の短母音 (つまり [e]) と混同されると説いている。この ²á 音の短音すなわち ⁴á が現われるのは、'母+子+子' という音構造の時である。(例, Alps, castle) また r の前でも ²á が短くなつて ⁴á となる。それは母音が後に続くか (例, chariot), -rr- となる場合である。(例, mar に対し marry, car に対し carry), つまりさらにもう一つシラブルを調音するために、「子+子」と重ねれば、mar, car の ²á は ⁴á と短くなる。しかし '-ar+子' の音構造では a は長くなる (例, part, participle)。しかし名詞からきた形容詞で r に終る語は、starry

の a のように依然として長音であり、名詞 star と同じ $\overset{2}{a}$ である。

(4) $\overset{3}{a}$ つぎに (§ 83) $\overset{3}{a}$ はサクソン語直系の音で、broad なドイツ語 a 音であるとしている。(例, fall, ball, gall など) なお au, aw (laud, law) という重母音の a もこれに対応した音であり、これはドイツ語の場合よりも開きが大きい (broader) と述べている。それでこれはいまの [ɔ:] に当るわけである。^{註2} なお § 84 では deep broad なドイツ語 a の長音は “a+ll” の音構造に現われるとしている (例, all, wall, call) から、この解説の関する限り、deep という説明を加えた方が開きが大きい、ということになる。また “-all” のほか “al+子音” (但し p, b, f, v 以外の子音) という音構造では、この [ɔ:] が現われる (例, salt, bald, false 等。但し外来語は例外で, Alps, Albion, calculate [kal'kúláte], amalgamate [a-mal'ga-mate] はみな, 'slenderer sound' であるとしているが、つまりこれは $\overset{4}{a}$ である。(但しこれはアクセントのある音節に限る。なぜなら al+子音の音構造が第一シラブルにあればアクセントは第二シラブルにつく (例, al-léy, val-léy)。この broad a [ɔ,a] の短音は、(1) “w+a+子” という音構造に現われる。(例, swallow) か、または “w+a+子+子” という音構造に現われる。(例, want, wasp)。なお a が [e] の時もある (例, any, many, Thames 等)。それでロンドン子は catch を ketch とし、また says はどの階級でも方言でも 'sez' とする。また cabbage, village, courage の -age の a は短母音 i となる。その他 “guttural (k,g)+a” は上品な会話では、e を介入して和らげる傾向がある (例, card→ke-ard; guard→ghe-ard)。そのほかまだあるが略して、E に移る。

(5) $\overset{1}{e}$ これは [i:] である (§ 93)。まず “e+子+黙字 e” という音構造では、語尾の黙字 e のため、語幹の e は長くなる (例, glebe, theme)。また “-e+” のごとく e で終る音節にアクセントがあれば、その e は長音 [i:] となる。(例, se-cre-tion, ad-he-sion) そして例外はただ where と there のみである。また助動詞として使う were は wer と綴られたこともあつたよ

うに、短母音であり、prefer, ere (=before 意。air のように発音する) とライムする。

(6) ²e これは (§95) bed, red, wed に現われる [e] である。この ²e は r の前では 'short u' (即ち ²u [=ə, Δ]) となるとし、したがって mercy は murcy と綴るように発音する。また単綴語末の e は ee [i:] のように発音する。(例, be, he, we, me) なお語末の e は本来語では黙字だが、外来の学術語では発音する。(例, simile, epitomé, apostrophe) また her の e は 'short u' (即ち ²u [=ə]) と発音する。またこの 'short u' は、writer, reader の末尾音にも出てくる。なお語尾の 'r' 音については、「この r は少し開いている、他の子音とは違い、はつきりした調音はない。つまり声の出るのを止める代りに、それを不完全に出す。そのためその母音の本来の音がこわされる」と説いている。この説明から考えても、r 音の調音運動のうち、[ə] に近い最初の口構だけであつて、これに続く狭まりの部分がないから、母音性が強いわけであろう。さらにこれは、ere, -tre のように 'r+e' なる音構造にも出てくる(例, theatre)。なおウォーカーはこの所をアクセントと結びつけて説いて曰く、terrible の e はアクセントがあるが、turrible のように発音してはならぬが、また splendour, tender, sulphur, suffer, martir の語末音節には音差をつけない。さらにこの e は (§99)、非強音語末音節では、i になりやすい。(例, faces, praises, poet, linen) この e は短母音 i ではあるが、正確にいえば 'long e' に対応した音である。また (§100) clerk, sergeant の e は特別で、dark, margin の ²a のように [ɑ:] と発音される。この例外的な特殊例は、'e+r+子' という音構造では、ここ数年来までは一般に e が a のように発音される、と思われていた。(例, merchant) ところで30年前つまり1745年頃まではこの mer- は march の [ɑ:] のように発音した。そして事実昔は marchant と綴つた、というように英語史上貴重な資料を与えている。^{註3}これに関連して注意すべきは、ウォーカーの時分でも下層階級では service, servant を sar- のように発音したし、また申流や上流でも挨拶では、

“Sir, your sarvant !” (はい、かしこまりました) とやる。また固有名 Derby, Berkeley も同じく [a:] とする。つぎに (§102) アクセントのない末音節中で ‘e+l or n’ という音構造の時は、e が発音されないが、また ‘liquid +e+l or n’ の場合はやはり e ははつきりと音が出ない。(例, woolen [wul³l²n], flān⁴nel², women [wim³min²]) 多くはいわゆる曖昧母音的性格をもつた [i] となるわけである。但し ‘流音以外の他の子音+e+l or n’ の時は、novel [n⁴ov²vel], sud²den² のように e がはつきり出る時もあり、また raven [ra¹v²n], swivel [swiv²v¹l] のように e がまつたく黙字となる時もあるから、おそらく昔は [n⁴ov²el, n⁴ov²il], [s⁴adn, s⁴adin] と両様に発音したものらしい。これについて一般的な通則は出しにくいが、アクセントのない末音節で ‘e+l’ の時は、大体 e を発音する。また語尾の n の前の e は ‘l+e+n’ とならない時は、発音されない。(例, loosen [loos²n], hearken [h²ar²k²n] 等) また ‘mute ([p, t, k, b, d, g] どの閉鎖音) +en’ の時は (例, harden [h²ard²n], heaven [hev²v²n]), ‘流音+en’ の時は (例, fallen [fal³ln], stolen [sto¹l²n]), e を発音しない。また garden [gar²d²n], burden [bur²d²n] も gard²n, burd²n のよに発音する。これは特に注意する必要がある、なぜならば heaven の e をはつきり発音するのは vulgar で childish とされたからである。大体語尾にくる e は発音されないが、(例, loved, makes, replies, themes 等), 聖書では例外があり、過去分詞 ed は母音が前に来ない時は一音節となる (例, ‘Who has believed our report, and to whom is the arm of the Lord revealed?’ この二つの過去分詞形は -ed を一音節に読むから共に三音節語である)。つぎは I について述べよう。

(7) ¹i これは (§105) father の a と he の i とからなる二重母音つまり [ai] である。ただし開き気味で発音すると ‘ay’ となるから、できるだけ閉じ加減に (closely) 発音する。これは ‘i-e’ の時 (例, thine), アクセントのある i の時 (title, dial), ‘i+nd’ の時 (find, mind), ‘i+ld’ の時 (child,

mild) や、また pint などに現われる。なお (§ 106) ‘-e で終る’ 語が eye に聞かれる broad なイギリス音 (即ち [ai]) にならないで、狭い (slender) 外国語の e に似る場合がある。例えば shire がそれで、[shere] というように ‘sheer’ と発音する。(例, a knight of the shire, Nottinghamshire)

(8) ²i これは (§ 107) him, thin の短い [i] 音である。この ²i はアクセントのない音節に出る (例, san-i-ty [san' e-te], qual-i-ty [kwol' le-te]) この場合は子音を続けて閉じることをしないから、短母音と呼ぶのは適当でない。つまりこれは ‘long I’ 即ち二重母音 ay の後半分の音か、あるいは e の音である。なおこれに關聯して Dr. Johnson はこの短母音 i は ‘長い i’ (つまり [ai] のこと) と全く違つた音だといつているが、そうではないこといま説いた通りである。なおまた (§ 108) ‘i+r+子音’ という音構造の時 (但し音節末には来ない)、例えば virtue [ver' tshu], virgin [ver' jin] は vermin [ver' min], vernal [ver' nal] のように e の音であるか短い u の音に近づく。なお ‘i+r+子音’ が音節末に来れば、u の音である (例, bird [burd], shirt [shurt]) この例外は mirth [merth], birth [berth], skirt [skert], girl [gerl] である。そしてこの i は e のように発音される (例, merth, berth のように) そしてこの場合 r は母音と同じ性質をもつといつているが、これは r の調音に現われた母音性を取りあげたものとして、注目に値する。そしてこれは、‘a+r, rr+母’, ‘o+r, rr+母’ の場合 (例, arable [ar' abl], tarry [tar' re], marry [mar' re], orator [or' ra-tur]) と同じであつて、‘i+r, rr+母(音)’ の場合は i が ‘pure, short’ な音となる。(例, irritate, spirit) なおまた r のつぎに子音が来ない時は、または r が語末に来てアクセントをもつ時は、i は ‘deeper and broader’ な音となるが、これは短い e に対等な音である。(例, virtue [ver' tshu], virgin [ver' jin]) ここで筆者の私見を挾むと、この説明からわかることは、この virgin, virtue の -ir- のところは、bird, turn を [burd, turn] としているのでもわかるように、やはり同じ [e:] であるから ‘ur’ と同じになるわけである。結局ウォーカーの説明に i

が e と対等であるというから、'ir' が中母音的開きである以上、²e と ²u とが
 かなり近い開きをもつ、あるいは ²u の開きの範囲はかなり広い、ということが
 わかるのである。このことはウォーカー自身 fir [²fer] は fer'²ment の
 fer- のようにも発音するが、時には fur のように発音する、といつており、
 また sir [²sur], stir [²stur] も表記のごとく sur, stur と発音される、と説く
 ことから明らかである。これに關聯して当代一流のギリシャ学者でエドワー
 ド六世の教育係も勤めた John Cheke (1514—57) の友でウィンチェスター
 司教 Stephen Gardiner (1483?—1555) が当時の才人 Nicholas Rowley
 の 'wit' を Cheke に手紙で書き送つたが、その中で 'Let handsome girls
 be called virgins, plain ones vurgins' としているから、一応この ir と ur
 はそれぞれ 'close front' [²ver'²jɪn] と 'half close or half open middle'
 かまたは 'close back' [²vur'²jɪn] と區別されていたわけであろう。そしてこ
 の i は e の音価をもつべきであるのに u の音になり、そのため vulgar と
 考えられたことも注意すべきである。この規則の唯一の例外は、後に続く母音
 が u の時である。この u は半子音だから先行の i に影響を与え、例えば
 vir'²ulent の i は Sheridan では virgin の i と同じようになつているが、こ
 れは例外的ではない。この virulent の i は半子音 u に対応するが、i の半
 子音はないから、ウォーカーの説では ²ur (即ち [ə:]) という pure sound の
 方が polite usage であるとしている。また David Garrick は virtue の i
 について epigram を書いているが省略する。この i 音の不規則はここ十年間
 に増えたが、ee における狭い音に見られ、フランス語 イタリア語からの派生
 時に現われる。それでフランス語やイタリア語を知つていて、かえつて英語を
 知らないということは、逆に育ちを示すことになる。例えば Lord Chester-
 field (1694—1773) が子息に手紙を書いた頃は、上品な人々は oblige [¹o-
 blid'je', obleed'je'] を obleege (つまり後の方の発音) と発音して、つまり
 [oblige] といつたようなフランス語風な発音をして、舶来知識をひけらかし
 た。また Pope は besieg'd と oblig'd とを押韻した。^{註4}しかし Chesterfield

は子息に向つて曰く、この音 (obleege) は気取つた音だから避けるようにい
註5つてゐる。ところがそれから数年経つと obleege の方が一般に行われてしま
つて、ただわずかに下層以外の者が英国式に obliged と発音するようになつ
た。しかし Lord Chesterfield の手紙はそれから 20 年後に出版されたが、
教養人はこの「書簡集」(Lord Chesterfield: Letters to His Son. 1774)
を読んで影響をうけ、obleege でなく i 音を元通りに oblige と発音するよ
うになつた。そういう事情があつたから、もし数年前ならば vulgar と考えら
れた obliged の発音の方がふつう一般に聞かれるようになったのである。つ
まりウォーカーの時分は広い broad な英語本来の i (つまり \dot{i} 即ち [ai]) が
聞かれるようになったのである。つぎに (§ 112) i が ee [i:] のごとく外国音
をもつ場合をあげると、antique [an-tee¹¹k], fatigue [fa-tee¹¹g'], machine
[ma-sheen¹¹'], magazine [mag-ga-zeen¹¹'], police [po-leese¹¹'] などであ
る。この音が i となつて現われる場合は (§ 113), 音節始に出てくる時であ
る。すなわち非強勢の音節で 'i+母音' という構造をもち、しかも i の前に歯
音が来ない場合である。例えば mil-iary [mil²/ra-re¹], bil-yary [bil²/ra-re¹],
min-ion [min²/yun²] はそれぞれ mil-yary, bil-yary, min-yon と綴つたよ
うに発音する。この場合 i は全く y (半母音) になるから、-ia-, -io- を二
つのシラブルにわけるのは間違ひである、といつてゐるのでもわかるように、
この i は j に吾るわけであろう。なお (§ 114) アクセントのすぐ前のシラブル
末尾に i がくる時は第一アクセントがきても第二アクセントがきても、i は
長音 i (つまり [ai]) となる (例, title [ti'tl]) が、あるいはフランス語の i
(つまり [i:]) がくる。(例, magazine [mag-ga-zeen¹¹']) またアクセント
のつぎにくる音節末に i がくれば、いつも e のように発音される。(例, sen-
sible [sen²/sibl], ratify [rat⁴/te-fi¹]) しかしアクセントのすぐ前の音節末に
くれば、i は長音 [ai] となるか (例, vitality [vi-ta¹/le-te²]), または短音 [i]
となる。(例, digest [di¹/jest²]) つぎに (§ 115) 第一音節が i だけで始まり、
アクセントが子音で始まる第二音節にあれば、i は長い二重母音となる。(例,

^{1 1 4}ide/a, ^{1 2 1 1}identity [i-den'te-te], ^{1 4 4 1}idolatry [i-dol'la-tre], ^{1 4 1}ironical [i-ron'ne-kal]。この例外は ^{1 4 2}imagine [e-mad'jin] だけである。この点諸辞典を参照して示すとつぎの通りである。

Sheridan	Scott	Buchauan	Johnston	Kenrick	Perry	Walker
idea	idea	idea	idea	idea	idea	^{1 1 4} i-de'a
identity	identity	identity	identity	identity	identity	^{1 2 1 1} i-den'te-te
itinerary	itinerary	itinerary	itinerary	itinerary	itinerary	^{1 2 2} i-tin/ner- ^{4 1} ar-e

また (§ 116) 第一音節末に i がきてアクセントが第二音節にくる場合、その強勢音節が母音で始まれば、i は開き長重母音 [ai] を保つ。(例, ^{1 4 1 2}diameter [di-am'e-tur], ^{1 2}di-ur'nal) もしこれを外国訛で発音すれば i が e となる。(例, 'de-ameter, de-urnel'のごとく; つまりフランス語 machine の [i:] のように, di- を de- [di:] と発音するわけである。しかしこれは一般人の耳ざわりになる。また i の細い音である e 即ち [i] がつぎに続く母音と連結すると, geography を joggraphy としたり, また geometry を jometry としやす。また発音の正確を期する者は, biography の bi- は buy とする傾向がある。また (§ 117) アクセントのない第一音節末に i がきて, 第二音節が子音で始れば, i は e と書くのと同じで狭い, つまり [i:] か [i] となる。(例, Chimera [ke-me'ra]) 以下 (§§ 118—38), bis-, bi-; tri-, chi-, ci-, cli-, cri-, di-, fi-, gi-, li-, mi-, ni-, phi-, pi-, pli- pri-, ri-, si-, ti-, tri-, vi- の音構造をもつ語について, i の長短を論じる。さらに (§§ 139—) 黙字 e で終わるアクセントなしの末音節に出る i も長短不定で規則を造りにくい, 強勢音節が前にくれば i は短い。(例 hostile [^{4 2}hos'til], virile [^{1 2}vi'ril], respite [^{2 2}res'pit], deposite [^{1 4 2}de-poz'it])。この規則の例外は exile [n. ^{2 1}ek'sile, v. ^{2 1}eg-zile'], empire [^{2 1}em'pire], fin'ite などで, これは長く

[ai] となる。つぎに後から二番目の音節にアクセントがある時、即ち '— + — + i¹e なる音構造では i の長短は決定しにくい。例えば原則として —ice (sacrifice [sak'kre-fize]) は短、—ime (pantomime [pan'to-mime]) は長、—ine (saccharine, crystalline) は長短不定である。その他 —ire, —ise, —ite, —ive, —ize の場合を検討している。また (§ 160) 'g, c+a' の音連結の時 e に似た音が入り、子音をやわらげることを、a の箇所 (a 項) で述べたが、同様はここでも 'g, k+i' の音構造では sky は ske-y, kind は ke-ind のように e を介在させて発音する。つまり a, i は g, c, k の影響をうけるわけである。しかし i は事実上 'a+e' という複合体であることを考えるなら、驚くに当たらない。とにかく聴覚的には i は 'a+e' [æ=ai] と等しいわけである。とにかく kind を 'ky-ind' と発音するのは、舞台の言葉であるから、一概にひどい言葉だとか耳ざわりな発音だときめつけるのはよろしくない、と論じている。これは k, g の破裂が終つてもその奥母音的口構えから、前母音 [ai] に移る時、一種のわたり音 (glide) (例えば [ə] のごとき) が出るのを、e と把握したものか、あるいは単に i という文字にひきずられて前母音的 e を出したのかもしれない。なお —e で終わる場合ではないが、—ity, —ible の —i を論じて、sensible [sen'se-bl], visible [viz'e-bl] の i はアクセントがないので、'sensuble, visuble' のように発音されるとした。これは今日でもこのアクセントなしの i は [i] と [ə] とともに発音されると説くのと同一考え方である。また charity [tshar'e-te], chastity [tshas'te-te] も 'charrutty, chastutty' のごとく発音する。そしてこのように i を e のように発音する方が 'elegant' だと、ウォーカーは述べている。以上で i 項を終わり、O に移る。

(9) ¹o まず (§ 161) o は、普通文法家が三つにわけるとして。例えば Sheridan は (1) nor ([ɔ:], これはウォーカーの ³a に当る), (2) not ([ɔ], これはウォーカーの ⁴o に当る), (3) prove ([u:], これはウォーカーの ²o に当る) の三類をたてる。さらにこれに加えてウォーカーは、(4) love [luv], dove [dʌv]

の [A] の音価をもつ 'o', (5) or, nor, for の o を r と複合的に考えて(1) の [ɔ:] (ウォーカーの音組織では a に当るわけ) に対して [œ] を考えるほか, (6) woman [wum'un, cf. pl. wim'min], wolf [wulf] の [u] もあげている。つぎにこれについての説明を見ると, まず (§ 162) ¹o は, この文字の呼名の音で, 'long open 'o' (長開き o 音) である。なおこれを 'long open' と呼ぶのは, prove [p²²roov] の o 即ち oo [u:] を 'long slender' と呼ぶのに対応する。この ¹o は, (1) 黙字 e の前 (例, tone, bone, alo'ne) (2) アクセント音節の末尾 (例, motion [mo-shun], po-tent), (3) 単音節語 (例, go, so, no), (4) 他の母音と複合して綴られている場合 (例, moan [mone], groan [grone], bow [弓, 屈む, 共に bow], low), (5) -st の前 (例, host, ghost [gost], post, most), (6) -ss の前 (例, gross [grose]) に現われる。以上の例でわかるのは, これらは現在 [ou] であるが, ウォーカーたちはこの重母音性を意識しないで, ただ長母音としたと思われるのである。なお Wyld (Short History p. 179 et passim) が, ME^o 系の 'a long mid-back-slack-round' 「中奥緩円唇長母音」と説いているのは, この種の o と同じであるが, この [o:] 音はこの説明から考えると, Short History (p. 40) で Wyld があげている 'Bell-Sweet' 張りの母音表に出てくる /ɜo/, つまりドイツ語の Gott の o を長くしたものであろう。大体この \bar{O}_2 は 16 世紀

	A M E R I C A N			
	Webster 1781	Webster 1828	Alexander 1800	Worcester 1830
loth	ɔ:	?	o:	o:
sloth	ɔ:	ɒ	o:	o:
	B R I T I S H			
	Buchanan 1766	Perry 1777	Sheridan 1780	Walker 1791
loth	ɔ:	o:	o:	o:≡ ¹ o ?
sloth	o:	o:	o:	o:≡ ¹ o

まで続き、その頃から次第に Tense [ō] となる。(即ち前の母音表では /ʊo/, つまりフランス語 beau の 'o' 音) それで今日の [ou] となるのはずつと後である。Jespersen (MEG I. p. 326) は、moan, mown は 19 世紀に入つて ou となつた、と説いている。ウォーカーにおいてこの種の音が [o:] であつたことは、まず疑を入れる余地はないと思うが、参考として K.E.Lindblad の AE, BE の諸辞典による音比較表をあげておく。

(10) ⁴o つぎに (§ 163) 第二の o は、not, got, lot に出てくる短母音の o である。この o は「ウォーカー音声表」(原辞典 p. 71) では ⁴o としてあるから、以下 ⁴o として記述する。さてこの ⁴o は他の短母音と同じく、いま述べた ¹o (= [o:]) をそのまま短母音としたものではない、と説明しているが、これは長さの差だけでなく、音質の差にも注意したわけである。そしてこの ⁴o は正しくは what [hwot] の 'a' に対応するわけであり、'broad' な音であるとウォーカーは説明しているが、大体今日の [o] かこれに近い音、例えば [ɔ] 類としてよかろう。なおこれについては K. E. Lindblad の研究が参考になるので、結果だけ表示しておく。

	A M E R I C A N			
	Webster 1783	Webster 1828	Alexander 1830	Worcester 1830
cloth	ɔ:	ɒ	ɔ:	ɒ, ɔ:
moth	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ
	B R I T I S H			
	Buchanan 1766	Perry 1777	Sheridan 1780	Walker 1791
cloth	ɒ	ɒ	ɔ:	ɒ ⁴ =o
moth	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ ⁴ =o

そこでウォーカーにもどると、事実詩では not, got, lot は what と押韻をふむが、この not, sot の短母音 o (つまり [ɔ]) に対応した長母音 o (即ち [o:]) は、naught [nawt] の au, sought [sawt] の ou, hall [hall],

ball [bawl] の ³o に対応するわけである。この ⁴o [o:] の短母音は father の短母音と同様 (§§ 78—9 参照)、しばしば不正確な話手により特に大衆の間では長く延ばしてこの長母音に近い中母音的な ³o (つまり or の o) とする。これは a の場合と同様、‘子+子+o’ という音構造の時に現われる。例えば broth [broth], froth, moth は Smith 説では ‘browth, frowth, mawth’ のように [o:] と発音したが、ウォーカーでは ⁴o である。この音の適不適は教養ある耳で判断する要がある。すでに a 音の § 79 で述べたように、もしこの種の音が best speakers の間で聞かれなかつたなら、この中間音 (middle sound) は許さるべきではない。

(11) ²o 第三は ‘double o’ つまり oo に対応した ‘long slender’ な音 (即ち [u:]) である。これは発音図表からいうと、²o となる。この ²o が現われる語は少いから一覧表もあげられるが、例えば prove [p²²roov], move [m²²oov], behoove [be-²²hoov’], lose [loo²²z], Rome [roo²²m] (これは [roum] ではなく、[ru:m] と発音する), poltron [pol-²²troon’], who [hoo²²], whom [hoo²²m], womb [woom], tomb [too²²] などである。なお poltron は長音 ³o だから、o を ‘oo’ と綴つた方がよからう。それから gold はくだけた話態では goold [gu:ld] と発音されるが、詩や戲かな言葉遣やことに聖書の場合では、常に ¹old, fold と押韻する。(つまり gold は [go:ld] となる)。なお gold については Wyld も、いまの [gould] という発音の前に [gu:ld] という音があつたことを示している。(A History of Colloquial English. p. 239)

(12) o₄=²u 第四の o は (§ 165) love [luv], dove [duv] の o, つまり [A] であるから、前に述べた ²u に当るわけである。これに一番近い関係にある長音は、note, tone, rove の ¹o であるといつているが、¹o は [o:] であるから、もしウォーカーの言葉通りに考えるなら、tub [tub], cup [kup] の場合の u (=u) と、love [luv], dove [duv] の o (=u) とは同一音族としての「同一性」をもつ、ということになるわけであろう。したがつて u (=u)

と o^1 との関係は問題にされないでも、 $o (=u^2)$ と o^1 との関係は問題になってくるわけであろう。なおこれは歴史的变化の問題および方言の問題もからんでくるので、ますます複雑になってくる。なお参考に Karl-Erick Lindblad の表をちよつと変えてあげておく。

	A M E R I C A N			
	Webster 1783	Webster 1828	Alexander 1800	Worcester 1830
doth	o:	—	—	Λ
bomb	Λ	Λ	Λ	Λ
monk	ɒ	ɒ	Λ	Λ
	B R I T I S H			
	Buchanan 1766	Perry 1777	Sheridan 1780	Walker 1791
doth	—	—	Λ	Λ ² Λ=u
boml	ɒ	Λ	ɒ	Λ ² Λ=u
monk	Λ	Λ	Λ	Λ ² Λ=u

なお doth は ME \bar{O} 系, bomb, monk は ME \bar{u} 系であるが、いまここで論じている $o_4 = u^2$ [=Λ] の資料として使うことができる。なおほかに Arthur J. Bronstein & Esther K. Sheldon: 'Derivatives of Middle English \bar{O} in Eighteenth- and Nineteenth- Century Dictionaries' (American Speech. May, 1951) という好研究もあるので、そこから (Table I, p.82 所載) 一つ取つて示す。

	Johnston 1771	Kenrick 1773	Perry 1788	Sheridan 1789	Walker 1791	P. D. 1796	Jones 1798
stood (OE stod)	u	(not pron)	υ	υ	(^x Λ) u [=u]	υ	υ

ここで Bronstein-Sheldon (Queens College) は Walker の欄の説明に 'tub の母音である' ([Λ]) とするが、それは間違で、 u^3 (= [u]) である。そ

こでウォーカーの説明を聞くと、この $o_4 (=u)$ が現われるのは、(1) 流音 (m, n, r) と続いたため o が短くなつた時か、(2) または半母音 v, z, th のつぎである。いま Nares のあげた表は、当時の音を知る資料として重要であるから示しておく。Above [prep. a-buv'; adv. a-bove'], affront [af'frunt], allong [a-long'], among [a-mung'], amongst [a-mu'ngst], *attorney [at'tur-ne], *bomb [bum], bombard [bum'bard], borough [bur'ro], brother [bru'thur], colour [kul'lur], come [kum], comely [kum'le], comfort [kum'furt], company [kum'pa-ne], compass [kum'pus], comrade [kum'rade], combat [kum'bat], conjure [kun'jur], *constable [kun'stabl], covenant [kuv'e-nant], cover [kuv'ur], covet [kuv'et], cozen [kuz'zn], done [dun], doth [duth], dozen [duz'zn], front [frunt, front], glove [gluv], govern [guv'urn], honey [hun'ne], Monday [mun'de], money [mun'ne], monk [munk], monkey [munk'ke], month [munth], none [nun], nothing [nuth'ing], one [wun], onion [un'yun], other [uth'ur], oven [uv'v'n], *plover [pluv'vur], *pomegranate [pum-gran'nat], pomel [pum'mil], pother [puth'ur], romage [rum'midje] *shove [sheuv], shovel [shuvl], sloven [sluv'ven], some [sum], Somerset [sum'mu-set], son [sun], *sovereign [suv'er-in], *sponge [spunje], stomach [stum'mak], thorough [thur'ro], ton [tun], tougue [tung], *word [wurd], *work [wurk], wonder [wun'dur], *world [wurld], worry [wur're], *worse [wur'se], *worship [wur'ship] *worth [wurth] などである。星印は重要語にかぎつて、多少問題になるものに、本研究者がつけたものである。なおウォーカーは、once [wunse], co-lander [kul'lan-dur] もこの例に加えている。以上ウォーカー表記法は一々書き換えて示したから、このようにそろつてたくさん見ればすぐわかるように、ウォーカーは綴字の文字とは別の文字を使つているのは、全く発音符号的になつているわけで注意に値する。いまあげた語例についてアクセントを調べ

ると (§166), これらの語はみな *o* の上にアクセントを持つ (但し pomegranate は例外)。また多少の例外は別としてアクセントのない語尾の *o* に同じである (例, cassock [kas'suk], method [meth'ud], carol [kar'rul], kingdom [king'dum] union [yu'ne-un], Amazon [am'a-zun], gallop [gal'lup], tutor [tu'tur], tronblesom (tru'blsum)) つまりこの語尾の *o* は今日の [ə] と同じであり, また強勢のある *o* [=u] は今日の [ʌ] と同じである。例外があれば, ギリシャ, ラテンの古典語からきたものであろう。

(13) *o* つぎに (§167) 第五番の *o* は長音で語末 *r* のために現れるか, 子音が続くために現われる。(例, for, former) これはウォーカー音図表では *o* となつてゐるものであり, 重母音 *au* に完全に対応するから, もし for, former の音だけを表わすならむしろ *faur*, *faurmer* と綴るべきである。但し例外があり, つぎの語では *o* (= [o:]) である。(例, borne [borne], corps [kore], force [fors], forge [forje], form (a seat, [form], [form]), forte [fort], porch [portsh], post, sport 等) この *o* は *a* と同じように, *r* の前では長くなるが, それは単音綴語の末尾となり, 他の子音が続く場合である。また *a* の場合と同じで, 流音が重なると, 短くなる。それで接続詞の *or* を *tor'rid*, *flor'id* の *or* と比べると *florid* は眼では *r* が一つだが, アクセントがあるから, 耳に聞えた感じは *florrid* のように *rr* と二重になつてゐる。それで別の種類の子音がこの位置の *r* の後に続けば, *o* は単音節の場合と同じく長くなる。ゆえに *orchard* [or'tshurd] の *o* は接続詞 *or* と同じで長い。また *formal* の *or* は *for* と同じである。しかし *orifice* [or're-fis], *forage* [for'a-je] では *o* が短かい。また *r* に母音が続く時, もしこの *r* が重なれば, *o* は短くなるので, この二語は *orrifice*, *forrage* と綴るような発音となる。

(14) *o* ₆=*u* [u] つぎに六番目の *o* は, *bull* [bul], *full* [ful], *pull* [pul] の *u* (つまり *u* [=u]) に対応した音である。しかしつぎの例のような場合に限るから, 不規則な音としてよかろう。(例, *woman* [wum'un], *bosom*

[²²boo'²zum], worsted [³wurs'²tid] のほか固有名 Wolsey, Worcester, Wolverhampton) またウォーカーは bosom を [²²buu'²zum] としているが、これは上にあげた表記 [²²boo'²zum] から推して、[bu:zəm] かこれに近い音を表わしたと考えられるから、むしろ u [=u] を活用して [³³buu'²zum] とした方が、彼の理論に統一性を与えるであろう。またつぎの表が示すように、この頃 bosom の 'o' が [A] 系の音であつたらしい、という事実もないらしいから、[uu] で [A:] 系の音を表記したとも考えられないから、ウォーカーの他の事例と同じように [u:] を '²²-oo-' で表わして [²²boo'²zum] とするか、あるいは本研究者の提案した '³³-uu-' を採るべきであろう。Lindblad から表を引いて示しておく、つぎのようになる。

	A M E R I C A N			
	Webster 1783	Webster 1828	Alexander 1800	Worcester 1830
bosom	u:	u:	υ	υ, u:
	B R I T I S H			
	Buchanan 1766	Perry 1777	Sheridan 1780	Walker 1791
bosom	ɒ	—	υ	²² u:= ²² oo

つぎにウォーカーは、o の不規則的な、アクセントのない音について述べている。まず (§ 170) 'a+流音+mute' の場合で述べたのと同じ事柄が、この場合にも当てはまる。この o は a と同様、「流音か子音」が続けば長音となつて現われる。しかしこの場合 o の長さは延びる傾向があり、それでますます 'vulgar' になつてゆく。それで castle, mask, plant の a を palm, psalm の a のように発音するのは、やや下卑しているが、それと同様に moss, dross, frost の o を, mawse, drawse, frawst と綴るように発音するのも普通でなく、例外的である。さらに solve [solv] の複合語 (例, dissolve [diz-zolv'], absolve [ab-zolv'], resolve) の o は、長くしても上品に聞こえる。また o が音節末にきて、この音節の前か後にアクセントがあれば (例,

polite, im'potent, po'lar, po'tent の o と同じほどの長音でかつ、開き方
 にすると、優美に聞こえる。また e と同じ様に、末尾節に o がきて、'c, k+
 o+n' の音構造の時は、o は suppress されて発音されない。(例, bacon
 [ba'kn], beacon [be'kn], deacon [de'kn], beckon [bek'kn], reckon
 [rek'k'n]) これは bak'n, beak'n, deak'n, beck'n, reck'n と綴るように発
 音される。また '子+c+o+n' の時 (例, falcon [faw'kn] は、'fawk'n'
 となる。さらに 'd+o+n' (例, pardon [par'd'n]) は o が黙字となり、
 pard'n とする。また 'p+o+n' (例, weapon [wep'p'n], capon [ka'pn]
 の時 o はやはり黙字で weap'n, cap'n とする。また 's+o+n' (例, reason
 [re'z'n], season [se'z'n], treason [tre'z'n] benison [ben'ne-zn] denison
 [den'e-zn], poison [poe'z'n], prison [poe'z'n], prison [priz'z'n], crim-
 son [krim'zn] は、reaz'n, treaz'n のごとく発音される。つまり以上の場
 合 o は黙字である。また mason [ma's'n], garrison [gar're-s'n] や、
 cotton [kot't'n], button [but't'n] も同様である。但し Sexton [seks'tun]
 の o のように発音する場合もあるが、これは例外である。また Stilton che-
 ese, Wilton carpets, Melton Mewbray の o も黙字である。また Milton
 はこの o を発音しようとしたが、それは例外で一般には認めにくい。なお bla-
 zon [bla'z'n] も blaz'n とするが、horizon では o を発音する。さてこ
 の種の o の黙字は無教養人がする省略ではなくて、簡潔化の現われである。
 黙字にするのが通例の場合、これを発音すれば奇異に聞こえ pedantic であ
 る。以上で o を終わり u にうつる。

(15) u これは tube の u や、またはアクセントなき音節の終わりにくる u
 (例, cubic) であり、これは二重母音的である。つまり 'e-u' というように
 e を前につけて [ju:] のように発音する。それで tube は 'tewbe', cubic
 [ku'bik] は 'kewbic' とする。ゆえにこの u は you [yoo] という単語の場
 合の発音と同じである。 (§ 171)

(16) u これは done [dun], son [sun] の 'o' [ʌ] 同じ音であるが、結局

これは dun, sun と綴つても同じである。(§165) この種の 'u' は、ウォーガーの発音表では ²u となつており、本研究者が多くの平均について調べてみた結果、現行の [ə] と [e:] の一部と、[ʌ] とを含んでいることがわかつた。(§172)

(17) ³u これは (§173) bull, full, pull の ³u である。前述の ¹u は, tube の二重母音的 'u' [ju:] であり, まな thine, mine の i [ai] と同じく長母音でもある。なおラテン語, イタリア語, フランス語の u を真似るため, u の前に出す 'e' [j] を省いて ¹tube, ¹mule を [tu:b], [mu:l] と発音することがあるが, この場合 [u:] の後の部分を ²²pool の 'oo' ほど長く発音しないし, また dull [dul] の u ほど短かくもしない。まずこの二つの中間である, としているからこれは, [u:], [ʌ] に対して [u'] ということになる。つまり ²²coo [koo], ²²woo の 'oo' の短音ということになる。もし woo と wool [wul] とをくらべれば, woo は長く wool は短い。つまり wool は bull [bul] と押韻するわけである。この中母音 ³u は (§174), ほかの一般の昔と違つて, bull, full, pull に現われる。また -ful の複合語は: wonderful [wun'du-ful], dreadful [dred'ful], fuller [ful'ur], fulling-mill ; bullock [bul'luk] bully [bul'le], bullet [bul'lit], push, pul'pit, butcher [but'tshur], cushion [kush'in, -un], cuckoo [kuk'koo], pudding [pud'ding], sugar [shug'ur] に現われる。しかし full 以外は数が少ないが, 田舎に住む英人はこれで苦勞している。またスコットランドやアイルランドの住民はこの発音でしばしば笑者にされている。この ³u 音は始めは判然としなかつたが, よく調べてみると, b, p, f という mute labials (閉鎖唇音) で始まり, l, s, t, d で終る語に現われる。(例, ³bull, ³full, ³pull, ³bush, ³push, ³put'ding, ³puss, ³put) なお put- でつく語を調べると, put (v.) はこの ³u (= [u]) だが, putty [put'te, ガラス用パテ] は u の普通の音, すなわち [ʌ] (²u) であり, nutty と押韻する。人によつては (§176), bulk, pun'ish の u は本来 ²u (= [ʌ]) であるのにこれを, 鈍い音つまり ³u にする。それからまた

‘r+u’の音構造では³uよりも長く、‘oo’(=[u:])のような発音となる(例、rue, true は roo, troo のように発音する)この中母音的‘u’(つまり³u)は (§177), 学術語にはあまり現われない。(例, fulminant [ful²menant¹], fulmination [ful²me¹na¹shun²], repulsion [re¹pul²shun²], sepulchre [sep²pul²kur²] は, dull, gull の²u つまり [Λ] を使う)そこで fulsome [ful²sum²], buss, bugle [bu²gl], bustle [bus²sl] の us, custard [kus²turd²] のように²u(=[Λ])を使う。つぎに (§178) u 音が以上の原則から離れた特別な場合は, busy [biz²ze¹], business [biz²nes²], bury [ber²ri¹] の三つである。スコットランド人はこれを bewsy [bju¹zi], bewsiness [bju¹:zines], bewry [bju¹:ri] と発音するので笑種となつてゐる。しかしわれわれが ‘bizzy, bizness, berry’ と発音する方が通則から離れて可笑しいのだから, われわれこそ赤面すべきである。アクセントのない音節末にこの u がくれば, 一般人だけでなく教養人も間違つて発音する。(§179) つまり u は ‘obscure’ (曖昧)な音として聞えるから, 他の音と間違えられるわけである。それで singular [sing²gu¹lar⁴], regular [reg²u¹lar⁴], particular [par²tik²u¹lar²] の音が ‘sing-e-lar, reg-e-lar, par-tick-e-lar’ と発音されるわけである。それでアクセントなしの曖昧な ‘u 短音’ よりも, 発音を俗化させるものではなく, また教養の有無を区別するのに役立つものはない。アクセントがあれば王侯から下々の者まで同じように発音して, 例外はほとんどない。ところがアクセントなしの母音では, 教養人は口をはつきり開いて発音するが, 無教養な者は声をおとして曖昧にぼかして, 他の音に変えてしまう。ゆえに上品な発音を志す者は特にアクセントなしの母音に注意する必要があるわけである。

V Walker 音韻論の総括

以上あらゆる角度からウォーカーの音韻体系を検討してきたが, ここでこれを総合して今日の母音四辺形のようなものにまとめあげるなら, 英語史の重要な資料として価値高いと思われる。それには Daniel Jones を中心として,

Kenyon-Knott その他の諸学説を参考にして、まず仮説的な母音四辺形をつくつて取りかかるのが便利でよろしい。もちろん 18 世紀後半の音組織と Jones, Kenyon-Knott の 20 世紀英語の音組織とか厳密にいつてそのまま全部対応するものではない。また当時の英語各母音の母価を一つの点としてはつきり出すことは、多少の難点が伴うものである。それでまず今日の BE の基本母音図に基づいて、ウォーカーの各母音にそれぞれ幅をもたせて、いわば「音域」といつたようなものとして、大体示してみることにした。その前にウォーカーの本文の説明は、彼の音声表とかならずしも一致しないので、つぎに本文の説明の方に従つてもう一度彼の音組織を表示しておく。

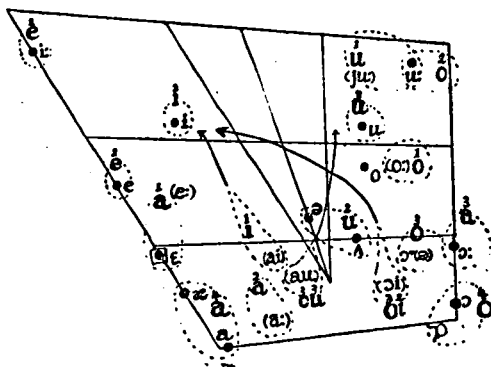
A ¹a [e:] ²a [a:] ³a [ɔ:] ⁴a [æ, a]
 E ¹e [i:] ²e [e]
 I ¹i [ai] ²i [i]
 O ¹o(1) [o:] ⁴o(2) [ɔ] ²o(3) [u:] o(4)=u [A] ³o(5) [ɔ:, ə] o(6)=u [u]
 U ¹u [ju:] ²u [A] ³u [u]
 ³²oi [oi] ³³ou [au]

これについてももう説明を要しないが、最後の ³²oi, ³³ou についてちよつと補つておく。まず ³²oi はウォーカーの説明では、'long broad ³o and shost ²i' としてあるから、[oi] に当るわけであり、³²oil, ³²toil, ³²soil のような場合に現われる。これはすでにあげた ³o [ɔ:, ə] と ²i [i] をほとんど無理なく組合わせて工夫したものでよくできていると思う。しかし ou の方はウォーカーの説明では 'long broad ³o and middle obtuse ³u' となつているから、文字通りには [ou] に当るわけであるが、例としてあがつているのは今日の [au] 系の語である。例えば thou [thou], pound [pound], cow [kou], house [house], hour [our], tower [tou'ur], town [toun] のようなものである。これら (OEū>) MEū 系の語に、初期近代英語で [ou] と二重母音化し、その後 17, 8 世紀には次第に [au] の方向に向つた、とするのが通説であるが、もしウォーカーの ³³ou の母価が説明通りに [ou] だとすると、この定説をくつがえすこ

とになつてくる。しかし実際はやはり [au] であつたと推定できる資料が、後で説くようにいくらでも出てくる。それならなぜ [au] であるのに ²o を ³u と組合わせたか、^{2,3}au としても、^{4,3}au としても一応筋が通るのではないか。その主な理由はやはり他の orthoepist と同じように、文字を重視していたためであろう。つまりこの [au] 音は、OEū>MEū 系であるから中世の終り以来 ou, ow となつて現われるのが普通であつて、au, aw という綴りは原則として広く行われなかつた。それで綴りにある 'o' を生かし、しかも [au] という音価を表示するため、²a, ⁴a を使わずに、³o のもつ 'broad' という性質の幅を 'a' に近いという意味にのぼして、³o を使つたものであろう。すると ^{3,2}oi と綴字上ある点で対応するし、また 'broad' という性質をうまく利用したわけで、実際的であるから便利であつたに違いない。それで多少理論上わずらわしい点を承知してやつた、という英人氣質の一つの現われと見ることができる。ここでちよつと Jespersen, Wyld を中心としていままでの定説に触れておくことにしよう。さてこの ME 系 ū>ou>au は初期近代英語の始頃、16 世紀にはすでに ou であつたと当時の文法家たちは説いており、17 世紀では例えば Cooper, Grammatica Linguae Anglicanae (1685) は 'au' としている。また Zachrisson も 15 世紀の abaught (about), faund (found) の au を指摘しているが、この頃の 'au' は [ɔ:] という音価の方が普通であるから、以上いろいろあげたものは完全なる確証とはなりえない。要するに ū>ū²>ou>au>au という順序で発達してきたことは事実である。そして 17 世紀半には come の 'o' か、dull の 'u' か、これに 'w' を加えた音形態をもつていたことも知られている。なお dull の u は 17 世紀には [u]>[ʌ] の変化は起つているから、これは [ow] ではなく [ʌw] かこれに近い音であつたと思われる。また Jones, Practical Phonography (1701) の実例では、but の u に 'oo' を加えたものとして現われるが、音価はほとんど同じであろう。また Sheridan では hall の a に noose の o を加えたものとしている。さらに T. W. Hill, Lectures on the Articulations of Speech (1821) では、

but の 'u' に bull の 'u' か, good の 'oo' を加えたとしている。この but の u に対して H. Sweet は 'low-mixed-wide' と説明しているが、それは 'ai' の a よりも 'one degree lower' としているから、いずれにせよ 'a, ʌ' 音族であることは明らかである。以上の説明によりウォーカーの辞書の出た18世紀末の cow, house の 'ow, ou' はおそらく [au] かこれに近い音価をもつていた、としてよいから、ウォーカーのあげた記号としての ³o の音価は [a] 族であつたとしてよかるう。以上の解説からわかつたウォーカー音韻論の「母音四辺図」をあげると、つぎのようになるう。

WALKER'S 'VOWEL CHART' RECONSTRUCTED



つぎにこの母音四辺図の説明をすると、黒丸は今日の Received Pronunciation の位置を示す。なお [e, ə:] のようにそれだけ単独の符号が、ウォーカーにない場合は四角の中に入れておいた。まず左上から左下へゆき、中母音系を経て右下から右上へゆく、という順序で説明しておく。

(1) ¹e [i:] は今日の [i:] の点を中心とした音域をもつ。(2) ²i [i] も今日の [i] を中心とした音域をもつ。(3) ³e [e] は今日の [e] を中心とした音域をもつ。問題は (4) ¹a [e:] である。これは 'long open slender' としてあるから、²e より下かあるいはほぼ同じ位置を中心とするが、air [are], chair [tshare], care [kare] の a も ¹a となつているので、つまり今日の [e] ま

で音域を拡げてみたわけである。なお Wyld (Short History of English, pp. 422, 363) によれば、ME 系の 'a'+r' と 'æ'i+r' が 1685 年の Cooper で e/ar となつて一致していることを述べているので、この air, chair, care の音価は [ær] よりも [eə] に近いと推定される。したがつて [e] に近い位置をとつているから、図のような細長い隋円形にしてみたわけである。(5) a[æ, a] はウォーカーの説明では 'Italian a', 'French a' とあるだけだから、今日の [æ] よりも [a] に近いと思うが、实例その他から推して (æ-a) 音域全帯を含むことにする。それは ²a [a:] を 'long Italian a' としているのと、対比しているわけであるから、[æ] よりも [a] の方がよかろう。なお Karl-Erick Lindblad はこれを単に [æ] としているが、[æ] だけで押し通すことは多少問題であろう。参考にこれをつぎに掲げて示すことにしよう。

	Webster			Perry	She- ridan	Walker	Jones	Alex- ander	Wor- ceter
	1783	1798	1828	1777	1780	1791	1798	1800	1830
waft	a:	a:	a:	a:	æ	æ waft ⁴	æ	a:	a:
wagon	æ	æ	æ	æ	æ	æ wag'un ^{4 2}	æ	æ	æ
twang	æ	æ	æ	æ	æ	æ twang ⁴	æ	æ	æ

この表でみても、ウォーカーと同時代の他の辞典の音価を [a:] としている場合があり、長さを問題の外においても、音質上 [æ] プロパーとは離れた音である。なおこれについてウォーカー自身も註記を加えているが、ここでは省略する。(6) ²a [a:] これは 'long Italian or middle a' としているから、前母音 [a] と奥母音 [ɑ] の中間に、図形のような音域をとつたらよかろう。(7) i [ai] は二重母音であるが、²a の近くに中心をもち、²i の方へ移動するいわゆる 'kinetic vowel' であるから、これを図形のように矢印で表わしたのである。(8) ou [au] これも 'long broad o and middle obtuse u' としているから、(7) の ²i とほとんど同じか近い点を中心として、³u へ移動する

'kinetic vowel' であるから、図形のようにする。もし [ou] も含むならば、
 起点を ³o 近くにとるのも一案であろう。(9) ³oi [³oi] これは 'long broad ³o
 and short ²i' とあるから、³o 近くに起点をもち、²i に移動する 'kinetic vowel'
 である。(10) ⁴o [o, ɒ] これは 'simple broad' とあるが、例から推して今
 日の [o] であるが、もう少し前下に出た、アメリカ語表記によく使う [ɒ] で
 あるかも知れない。現にアメリカ派の学者、例えば K. E. Lindblad はつぎ
 の表のように、⁴o をすべて [ɒ] としている。(もちろん AE 表記では、[ɒ]:
 [o:] を長さの違いに音質の差をからませているのが普通であるから [ɒ] も
 [o] も一つの音族と考えることはできようが、厳密に言えば別音であろう。)

	Webster			Perry 1777	She- ridan 1780	Walker 1791	Jones 1798	Alex- ander 1800	Wor- cester 1830
	1783	1798	1828						
swab	æ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ swob ⁴	ɒ	ɒ	ɒ
wan	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ	æ	ɒ won ⁴	ɒ	ɒ	ɒ
swan	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ swon ⁴	ɒ	ɒ	ɒ
wander	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ won ⁴ /dur ²	ɒ	ɒ	ɒ
warrant	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ wor ⁴ /rant ⁴	ɒ	n. ɒ v. ɔ:	ɒ
wash	ɔ:	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ wosh ⁴	ɒ	ɒ	ɒ
wrath	ɑ: (1789)	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɔ:	ɒ roth ⁴ æ rath ⁴	ɑ:	ɑ:	ɑ:, ɔ:
quality	ɔ:	æ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ kwol ⁴ /le-te ^{1 1}	ɒ	æ	ɒ
quantity	ɔ:	æ	æ	ɒ	æ	ɒ kwon ⁴ /te-te ^{1 1}	ɒ	æ	ɒ

(11) ³a [ɔ:] これは 'broad German' としているから、今日の [ɔ:] を中

心に音域を図形のようにもつた、と推定される。(12) ³o [ɔ̃(ə), ɔ:(ə)] これは 'long broad (nor, for) like the broad a' としているから、やや重母音的性質をもつた「複合音」として取扱うことができようが、これを [ɔ̃(ə)] とするかあるいは [ɔ:] ([ɔ:] の一つの変族音) と見て、それに 'r' の要素がついたものとするか (例えば [ɔ:(ə)]), 一応問題となる。これについては、つぎに参考として Lindblad の表を掲げておく。

	Webster			Perry	She-	Walker	Jones	Alex-	Wor-
	1783	1798	1828	1777	ridan	1791	1798	ander	cester
				1780			1800	1830	
dwarf	ɔ:	/	ɒ	ɔ:, ɒ?	ɔ:	ɔ: dwarf ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:
quart	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ: kwort ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:

いずれにしても音域は、図形のように [ɔ:] (a) の左側にあるとしてよからう。(13) ²u [ə, Δ] これは 'short simple' とあり、love [luv], dove [dʌv] の ²u は ¹note (o:) と近く、また her, winter, reader のようなアクセントなしの '-er' にも現われるとしているから、音域は ¹o の左下あたりから、[ə] および [Δ] を含むものと考えたらよい。(14) ¹o [o:] これは 'long open' とあるから、いまの [o] のわきに音域をもつとしてよからう。(15) ³u [u] これは 'middle or obtuse' とあるが、いまの [u] の近くに音域をもつ。(16) ²o [u:] これは 'long, close, slender' としているから、例から推して [u:] の辺りに音域をもつ。(17) ¹u [ju:] これは 'long, diphthong' とあり、つまり [u:] (o) の左側に音域をもつ、としてよからう。

以上の説明と位置づけによつて、ウォーカーの母音四辺図が得られたわけであるが、これによりいまままで望むべくして得られなかつた18世紀末近くの、つまり後期近代英語の英語音韻体系が完全なる形で再組織されたわけで、これは英語史研究上まことに劃期的な重要資料とならう。

なお子音については今日とほとんど変わらないから、問題はたいしてないが、

普通の文字として使うアルファベット p, b; f, d; t, d; s, z; l, r; m, n; k のほか, [g] は g で表わし, [g] を使わない。その他注意すべきは, y [j], ng [ŋ], th [θ], th [ð], sh [ʃ], zh [ʒ], tsh [tʃ] のように使う。また今 [dʒ] とする所は judge [ˈdʒɛdʒ] という表記でもわかるように, 語頭では文字名を採つて簡単に [j] とし, ほかでは [dj] としているわけである。いままで述べたところと, すでに図表で示したウォーカー子音体系を, ここで改めて子音分類表として示すと, つぎの通りになる。

		Labial	Dental		Guttural	
			Liquid			
mute		p	t	AST PE ID R	tsh	k
		b	d		dj(j)	g
Liquid	nasal	m	n			ng
						R
Hissing		f	s	ASPI R	sh	
		v	z		zh	
Lisping			th th			

なおこれについては, 前に述べた子音分類表のところの説明を参照すればわかるから, 説明はこれ以上必要としない。なお R 音が 'guttural liquid' として取扱われていることは注意すべきである。また y と w は半母音取扱いをするので, この図表から省いた。最後に R 音について一言附加えておくと, Shakespeare に R 音が 'rolled uvular' (懸壜垂顫動音) であつたらしいことは, つぎのように R 音を 'the dog's name' としていることから明らかであるが, Walker が上の子音表に見るごとく, R 音を 'Guttural' としたこと

は、この R 音の系統を示すものとして注目に値する、というわけなのである。

Nurse : Doth not rosemary and Romeo begin with a letter ?

Romeo : Ay, nurse ; what of that ? both with an R.

Nurse : Ah, mocker ! that's the dog's name ; R is for the——

Romeo and Juliet. II. iv. 221—23.

補 註

(註釈は Walker の本題に関係深いものについて述べる)

註 1) Walker と Johnson との親交については、(1) The Letters of Samuel Johnson (Collected & Edited by R. W. Chapman) Vol. II. 1952. p. 525 に 'Walker visits Johnson' の記事があり、また Johnson は '26 Dec. '82. To Mrs. Thrale の手紙で、'I have thus day seen Mr. Allen, Hoole, Compton, Walker, and Cambridge' とある。また Boswell's Life of Johnson (Oxford Standard Authors, 1904, New Edition. 1953) の p. 1224 (Friday, 18 April 1783), p. 1395 (Monday, 20 December 1784) に Walker の記事あり。また Dr. Johnson's Dictionary (Essays in the Biography of a Book) by James H. Sledd and Gwin J. Kolb, Chicago U.P. 1955. (pp. 256) の pp. 155, 174—75, 176—7, 182, 202, 203, 214, 239, 243 にも Walker の記事あり。

註 2) この a³ については、Karl-Erick Lindblad, Noah Webster's Pronunciation and Modern New England Speech (Upsala and Harvard U. P.) 1954. pp. 90 にはつぎのような 'wa+r' の例と音価を各種辞典について調べてあげているから、参考に掲げることにして。なお例にあげた表記は追書きしたものであり、本文中に取り入れた他の学者の事例でも、発音表記は全部本研究者が入れたり、訂正したりした。念のため。

註 3) この merchant は [mer'tshant]² となつているが、Sheridan はこ

	Webster			Perry 1777	She- ridan 1780	Walker 1791	Jones 1798	Alex- ander 1800	Wor- cester 1830
	1783	1798	1828						
war	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ: war ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:
ward	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ: ward ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:
warm	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ: warm ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:
warn	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ: warn ³	ɔ:	ɔ:	ɔ:

れを mar- としているが、確かに 30 年前は 'a' が普通であつたが、その後 'a' の発音がくずれて 'e' となり、いまは 'a' は vulgar である、と Walker は諸家の説を引用しながら、註記でくわしく説明している。

註 4) この Pope の 'besieg'd と oblig'd' との押韻は、'Epistle to Dr. Arbuthnot' ll. 207—8 につぎ例がある。

Dreading ev'n fools, by Flatterers besieged,

And so obliging, that he ne'er oblig'd ;

註 5) この obliged についての Lord Chesterfield の意見は、John Bradshaw, The Letters of Philip Dormer Stanhope Earl of Chesterfield with the Characters. 3 Vols. の Vol. I. London (George Allen) 1892. p. 249 に 'Letters to his Son' CX (Sep. 27, 1749) に、つぎの一節がある。

He [=a vulgar man] has always some favourite word for the time being ; which, for the sake of uring often, he commonly abuses : such as vastly angry, vastly kind, vastly handsome, and vastly ugly. Even his prononciaton of proper words carries the mark of the beast along with it. He calls the earth, yearth ; he is obleiged, not obliged, to you.....

註 6) この bosom について Walker は (1) bozum, (2) buzzum, (3)

boozam, (4) boozum という四通りの発音を示し, (3) の 'oo' は bull の [u] と同じ, (4) の 'oo' は house の 'ou' と同じとしている。そして Sheridan, Scott は (3) をとり, Perry は (4), Kenrick は (2), (4), W. Johnston は (2), 等々と諸家の説をあげ, Walker は (2) が 'most general' だと支持するが, しかし (4) は stage で行われるから, 'polite speakers' の間にはやり, かなり広く行われているという。なお Elphinstone は (2) をとるが, 元来は (3) であろうと, Walker はしている。

Bibliography

- Bronstein Arthur J. and Sheldon Esther K.; "Derivatives of Middle English \bar{o} in Eighteenth- and Nineteenth- Century Dictionaries" (American Speech. May 1951)
- Buchanan, James; Pronunciation of the English Language. 1766.
- Elphinstone, James; The Principles of English Grammar. 2 vols. 1765.
- Johnson, Samuel; A Dictionary of the English Language. 1755.
- Johnston, W.; A Pronouncing and Spelling Dictionary. 1764.
- Kenrick, W.; A New Dictionary of the English Language..... To Which is Prefixed a Rhetorical Grammar. 1773.
- Lindblad, Karl-Erick; Noah Webster's Pronunciation and Modern New England Seech (Upsala & Harvard U.P.) 1954. pp. 90.
- Lowth, Robert; A Short Introduction to English Grammar. 1762.
- Nares, Robert; Elements of Orthoepey, containing.....the whole Analogy of the English Language, so far as it Relates to Pronunciation, Accent, and Quantity. 1784.
- Perry, W.; The Royal Standard English Dictionary. 1788⁵.
- Sheridan, Thomas; A General Dictionary of the English Language. 2 vols. 1780.

- * Chapman, R. W. (ed); The Letters of Samuel Johnson. 1952.
- * Sledd, James H. and Kolb, Gwin J.; Dr. Johnson's Dictionary
(Essays in the Biography of a Book) Chicago U.P. 1955. pp. 256.

—Dec. 1955—